

亀山美知子

死にゆく人々に
教えられて



人文書院

亀山美知子

死にゆく人々に教えられて

人文書院



40.

著者略歴

亀山美知子（かめやま・みちこ）

1945年生れ。京都市立看護短期大学，佛敎大学文学部史学科卒。現在、京都市立看護短期大学教員。

著書『近代日本看護史』全4巻（ドメス出版，1983～85）。

このうちⅠ，Ⅱ巻が1984年度第4回山川菊栄記念婦人問題研究奨励金（通称山川菊栄賞）を受けた。その他論文多数。

死にゆく人々に 教えられて

一九八八年七月一〇日 初版第一刷発行
一九九二年七月二〇日 初版第七刷発行

著 者 亀山美知子

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院

京都市伏見区竹田真幡木町三九五
電話〇七五（六〇三）一三四四
振替京都〇一 一〇三三

印刷 内外印刷株式会社
製本 坂井製本所

© Michiko KAMEYAMA, 1988
Printed in Japan.

ISBN4-409-24027-7 C0036

死にゆく人々に教えられて*目次

遠い記憶	7
家族の構図・消えた少女	13
家族の構図・口紅	21
春を待つ人	26
名札	40
さまよう視線	46
四諦	50
苦痛を恐れる	62
麻薬	84
信州	96
憤り	108

記念写真

頑張り屋さん

「良妻賢母」

微笑

皇帝

民族衣裳

父の死

あとがき

171 161 151 141 132 119 113

死にゆく人々に教えられて

遠い記憶

あれは初夏のことだった。

看護学生になりたての私は、古びた病院の三階にある内科病棟で実習をしていた。患者に朝食後の薬を配るために個室のドアを何気なく開けた私は、一瞬たじろいだ。

狭い病室に置かれたベッドは、患者の枕元がドア側になるようになっていた。そのベッドにむこう向きに坐って食事をとっていた老婆が、ドアを開けた私のちょうど手元のあたりで、ふり仰ぐようにして笑いかけたのである。

瞬間、老婆の白い髪が乱れてばらけ、やせこけた顔には高く張った頬骨がいやがうえにも目立った。黄色く染まった眼球にはいくすじかの血管が浮き出て、濁ったような瞳が私のほうへ向けられている。口元だけがニッと笑っていた。

老婆は、その朝めずらしく気分がよいらしく、それを伝えようと私に笑顔を見せたので

あろう。だが、私の目にはその姿が鬼気迫る凄まじい形相としか映らなかった。

老婆の顔を直視できなくて、私はそっと目をそらせた。緩慢な様子で食事を口に運んでいる老婆の腕は、骨ばかりが目立ち、薄くて破れそうな皮膚が、黒っぽい洪紙のようにはばりついていた。

浴衣の上からでも、そこだけが異様に膨らんだ腹部がわかる。

私はその光景に怖気づいてしまい、老婆に笑顔を返そうとして、表情がぎこちなくこわばるのが自分でもはっきり分かった。それを必死に隠すと、あわてて窓の外へ視線を移した。明るい陽ざしが気持ちいいですね、とか何とかありきたりの言葉を口にして、その場をやつとのことできつろつた。おりからの風を受けて、窓のカーテンが軽く揺れているのが、まるで救いのようにさえ思えたものである。

老婆の病状は肝硬変の末期で、余命いくばくもなかった。実習に出はじめたばかりの私は、その老婆のことについてほとんど知らないまま、その朝、初めて接したのだった。

そそくさとその部屋を辞した私は、死に直面している人の、ぬきさしならぬ状況というものを見聞した思いで、ただただ脅えるよりほかになすすべもない自分の未熟さを思い知った。詰所のほうへ歩きながら、あの人に一体何と言えよよかったのだろうか、死が間近に迫った人に対して、正面から見すえながら、その人のために何かを言うことができるのだろうか？ と反問し続けていた。

こんな大変なことに対処しなければならぬなんて、私にはとても自信がない。たった今、目のあたりにした凄まじい光景に、私は曖昧な動機で看護婦への道を選んだことを後悔しはじめた。それまでに私が知っている「人の死」といえば、祖母の死だけだったからである。

祖母が亡くなったのは、私が中学二年の冬のことである。その日の夜七時ごろだったろうか、電話でしらせを受けた母や姉たちが、何ごとか小声で話し合うと、私にも外出の仕度をするようにと言った。何の説明も聞かされなかったが、私にも事態がすぐのみ込めた。家族はおし黙ったまま、重苦しい雰囲気の中で祖母の家へ向かった。

小さいころから、祖母は私をそれこそ「目に入れても痛くない」というほど可愛がってくれた。いつあらわれるともわからぬ孫娘のために、祖母はもらいものの菓子などを簞笥の抽出しのなかにこっそり貯めこんでいた。私が行くと、「おお、来たか、来たか」と祖母は目を細めて喜び、隠しておいた菓子を大事そうに取り出して私の手に握らせるのだった。ときには、私がなかなか訪ねて行かなかったために、折角の菓子がカビが生えてしまうこともあった。そんなとき、祖母は「早よう来んから」としきりに悔やんだものである。貧乏庄屋の娘として育ったという祖母は、年をとってから毎日のように野良仕事に出ていた。働き者の祖母は、病氣らしい病氣もしたことはなく、たまに医者の方へ行かねばならなくなっても、医者の方などは笑い飛ばしてしまうほどである。

祖母の唯一つの楽しみは、冷や酒を飲むことだった。厳格に育てられた当時の女性としては、めずらしい嗜みである。囲炉裏の間の水屋のかげに隠してある自分用の一升瓶をとり出し、湯呑茶碗に酒を注ぎながら「女でも、これだけはええからのう」と、このときばかりはいつになく尊大な様子で言っていたものである

だが、長年飲み続けたその好きな酒が原因だったようで、祖母の肝臓は硬く萎縮していった。風邪を引いて寝こんでいると聞いてからしばらくして祖母は亡くなった。八十六歳だった。

私たちが祖母の家へ駆けつけたときには、祖母の遺骸は奥の間に寝かせられていた。しらせを聞いた身内の者がつぎつぎと集まり、それぞれが小声でささやきあっている。脈絡があるようでいて、全く脈絡のない会話がそここで聞こえる。「眠るが如き大往生だったそうな」と誰かが言う、よかったよかったと何人かがしたり顔で、愛想笑いとともに相槌を打った。それが、私にはとても場違いなことに思えて腹立たしかった。

やがて、看護婦の経験があるという叔母の一人が、その娘とともに湯灌をするからと、祖母の部屋へ入り、襖を閉めた。襖のむこうでは、何か秘密めいた儀式がはじまったようだった。私はそこでどんなことが行なわれているのかを知りたいという衝動にかられた。だが、そんなことを考えたり、興味をもつことはいけないことのように思え、死者を凌辱するかなような自分の気持をひそかに恥じた。

翌朝、あらためて祖母の家へ行つたときには、すでに祖母は棺に納められていた。棺には金襴の掛け物がかけられ、懐剣が置かれていた。その懐剣にどんな意味があるのだろうか、一体、何に使うのだろうかという興味をもった。

出棺のとき、祖母に最後の別れをするために棺が開けられた。目を閉じた祖母の顔は小さく黒ずんで、まるで見知らぬ人のように見える。鼻や口には綿が詰められているのが異様だった。手は胸の上で合掌するように紐で縛られ、野良仕事で節くれだった祖母の指は青黒く硬そうに見えた。棺が運ばれるとき、祖母の体はその動きに合わせて物、体のようにゴトゴトと動いた。

私は自分も死んだらこんな風になるのかと、目の前の祖母の姿に自分の死んだときの姿を重ねあわせてみた。遺骸を見つめながら、悲しみより先に、死とは自分の知らないものへ変質してしまうものだという、乾いたような不気味さを感じていた。

強烈に印象に残っていることは、祖母の小さな死に顔と、棺に石で釘を打つときに泣きくずれていた母の姿である。それは、死が悲しみをもたらすものであるという実感を私に刻みこんだ。

今、眼前で髪の毛をふり乱している老婆は、人が死に立ち向かうときの凄まじさを初めて私の前にさらけ出したものだった。ひどく痩せて腹部だけが突出し、濁ってはいるが鋭

い眼光が、仏教でいう人生の一大事であることを如実に表わしている。

そして、死を前にしながらも笑顔を私に向けてくれた老婆の姿は、死に抗^{あらが}って生きようとする人間のしたたかさを教え、そこには何の容喙も許されないことをも示していた。

普通の人間が一生のうちで出会う死とは、身近なほんの数人の人の死である。また、人は他人の死から死を学ぶという。私は、こののっぴきならぬ現実を目のあたりにしたのち、死とは決して曖昧にするものや、逃避するものではなく、厳然として直視せねばならぬものであると知った。だが、自らの幼さを見すえたとき、はたしてよくこれに対処し得るかどうか、全く判らなかった。

老婆は、それからしばらくして他界した。だが、あの朝、おそらくは渾身の力をふりしぼって私に向けてくれた凄まじいばかりの笑顔は、今でも私の遠い記憶のなかから鮮明に甦^{よみが}ってくる。

家族の構図・消えた少女

意識を消失したままの十六歳の少女が入院してきた。ひどい発熱が数日続いたのち、意識が無くなったのだという。原因不明のため検査がはじまったが、そのうちに呼吸まで止まってしまった。少女は人工呼吸器の助けを借りなければ生きられなくなった。いわゆる植物人間になってしまったのである。

田舎の人らしくいかにも純朴そうな両親は、交替で少女に付き添い、看病を続けた。二人は意識のない少女を、まるで赤ん坊でもあやすように可愛がった。

少女の体を拭きに行ったとき、私は彼女の前髪のはえぎわに大きな黒斑があるのを見つけた。

「あら、この斑点は昔からあったんですか？」

黒い斑点が急が増える病気を疑ったからである。すると、付添っていた母親はニコニコ

しながら答えた。

「そうなんですよ、この子は小さいときからこの黒いのがあつたんです。今は髪で隠れますけど、小さいころは氣にしましたんや」

まったく屈託ない様子で話す母親に、まるで私はその黒斑を見咎めたような、ばつの悪い思いをした。

「そう、じゃあ、また見えないように隠しときましょうね」

とりつくろうように少女の髪を直し、浴衣をととのえた。

「はあ、有難うございます。……まあ、綺麗にしてもろて。よかったなあ、みっちゃん」

いかにも人の好きそうな笑顔を作りながら、母親は娘のかたわらに来て、いとおしむように髪を撫でつけている。彼女には娘が植物状態という深刻な状況に置かれていることなど、まるで頓着している様子がなかった。そればかりか、娘と一緒にいられることがとても幸せそうで、平和な光景にさえ見えた。

植物状態とは、人間の中枢機能（脳のはたらき）のなかで、いわゆる動物的なこと、たとえば人間的な、考えたり行動したりといったことを司るもの以外の、いわば生命を維持するうえで必要最小限のはたらきのみが残された状態をさす。

この当時、アメリカのカレン裁判が続いている最中であり、植物人間となったカレ